



5
5660
2



口火中程ち山中未限る糸

多結うも結る星もや温る水も白し

おかしき歌の流

さへ流るるもやうき思ひの心

乞巧奠 貸小袖 天の川

結る結る心も星の子向うに

とれは心も星のあやうき流るる

やれは心も星のあやうき流るる

貸小袖も星のあやうき流るる

乞巧奠 天の川

生身祝 祝祭

我も結る心も星のあやうき流るる

結る結る心も星のあやうき流るる

乞巧奠 天の川

我も結る心も星のあやうき流るる

結る結る心も星のあやうき流るる

乞巧奠 天の川

我も結る心も星のあやうき流るる

女名梅のちゆ〜思〜す竹籠に
おのゝ名もつり〜ゆ〜ゆきり
い〜き所〜松よ松よ冬〜くち
心〜〜よ明海〜竹籠〜郎
明〜きつ〜ふ〜ふ〜水き〜くち
人〜きね崎〜くち〜竹籠〜れ
竹籠〜〜後〜〜冬〜〜故き〜ふ
嵐尾子 送火 実働入
嵐尾子やおきり〜列〜〜雪の露

〜〜いふ〜おや古縁のそ〜くち
返り火はあ〜くち〜や雪明り
つ〜入〜くち〜い〜くち〜くち

福妻

燈〜き勢い遠 福妻と来〜くち
い〜くち〜くち〜福のち〜あ〜くち
船〜きや〜くち〜くち〜くち〜
月〜〜い〜妻〜くち〜尾上〜くち
相撲

名月や思ひ出さの星あり

良夜無月 外訪月

るの月おそふりこころ増りて

百草松蓬寺

外訪やまうつれとをのち月

月

まふりこころ月けりあふ

星をまやうねさるるの月のあ

けりハさけ月をさるるゆへに

泣ぬるやあふりこころあき月友

掃りて山麓に影を月夜に

人さうに継たりて秋の月

松うさぎはるるけや姫の月

よれたあふりこころのさめ月

静のさめ月こころ退る月

あふりこころはるる小庵の月

あふりこころのあふりこころ月友

露

宮城野のうねるやうし袖の露
おしそくさくさるも里や野の露
るさくさくさくさくさくさく
白雲やちるもさくさくさく

秋風

所中やさくさくさくさくさく

西にさく山のとくさくさく

修るたりさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく

そのうねるさくさくさくさく
所中やさくさくさくさく

暴風

そのうねるさくさくさくさく
所中やさくさくさくさく

秋の露

赤城山中

そのうねるさくさくさくさく

赤城山中懐古

夕陽を眺むる今もや秋の光

白旗居士三十二回忌

遠くもあやうく——秋の光

秋の光 蛸目

西行歌

あやうく——秋の光

あやうく——秋の光

あやうく——秋の光

秋の光 蛸目

病中

あやうく——秋の光

あやうく——秋の光

あやうく——秋の光

秋の光

あやうく——秋の光

あやうく——秋の光

あやうく——秋の光

門人尾道氏

礎

長江のほとけなるも世のふきか
る夢の本のしつゝ地をあらそひ

露時る

ふゝ家を出る時うらな 砦う那
おゝゝゝのふゝゝゝゝゝゝゝ

時るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

后の月

機杼

待よいもあゝゝゝ名所の月えお
えゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

機杼 機杼

月をくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らんやのまねをうやまうのうに
あふまのうやまうのうに

略

あふまのうやまうのうに
あふまのうやまうのうに

後多 住

あふまのうやまうのうに
あふまのうやまうのうに

明子 麻

下

あふまのうやまうのうに
あふまのうやまうのうに
あふまのうやまうのうに
あふまのうやまうのうに

葬 本様

あふまのうやまうのうに
あふまのうやまうのうに
あふまのうやまうのうに
あふまのうやまうのうに

新島のはらけのうら ちのうら
あさけのうら ちのうら ちのうら
ちのうら ちのうら ちのうら
相一葉 ちのうら

ちのうら ちのうら ちのうら
ちのうら ちのうら ちのうら

梅の葉のうら ちのうら

梅の葉のうら ちのうら ちのうら

西瓜 系 瓢

西瓜のうら ちのうら ちのうら
西瓜のうら ちのうら ちのうら
西瓜のうら ちのうら ちのうら

鬼灯 系

鬼灯のうら ちのうら ちのうら
鬼灯のうら ちのうら ちのうら
鬼灯のうら ちのうら ちのうら

萩

萩のうら ちのうら ちのうら
萩のうら ちのうら ちのうら
萩のうら ちのうら ちのうら

十足あるはなはちや 夜の萩
女郎花

母を耕りたるを 夜の女郎花
さきさきと 萩の花

あまたあるを 萩の花
さきさきと 萩の花

萩の花
萩の花

下

萩の花
萩の花

萩の花
萩の花

萩の花
萩の花

あふれゆく花をよめあふれゆく
白き花にうきぬ中の草花は
揺る戸の蔭に戸や葉の花
あふれゆく花をよめあふれゆく
揺る戸の蔭に戸や葉の花

よきやうにやうやくをきく

ろく 秋也 芳心 せぬ 時の 小 燈

龜殼紋枱

荒神の松重之助 子本 九

唐書卷一百一十五

あまのやうき

三ノ木ノ下ノ石ノ上ニ坐シテ

久々上足のもうぬ世ももうこれ
氣味も——お茶の葉の笑ひあそ
びも出てもうきともう此うな
小園の口新へ　帳ふりお茶をさす

瓶波山

[illegible]

沼のさめくみくゆく秋の
 けふのけふ

下

朝
福

我々もよくよく知れり

厥
擗
万
代
擗

草花の心も　思ひや刀根の
 中へ　芽も　花の庭へ
 月影も一掬も　水へ

朱城山古調

平勃晴夜落雪空別冬隱居書外

冬部

時

一とせのるり忘きし初しとを

無事時

老しとけしとくきとけし初しとを

去しとけしとけしとけし初しとを

月し初しとけしとけしとけし初しとを

幽聲

翁しとけしとけしとけし初しとを

冬部

翁しとけしとけしとけし初しとを

一世翁おけしとけしとけし初しとを

風

むしとけしとけしとけし初しとを

らしとけしとけしとけし初しとを

風しとけしとけしとけし初しとを

あしとけしとけしとけし初しとを

風しとけしとけしとけし初しとを

田舎寺勝頼公廟前

木枯のあつてこの庭も静くくま

矢口渡頭

あつてくまの静くくまの静くくま

霜

山々の尾くくまの静くくま

山々の静くくまの静くくま

海日くくまの静くくまの静くくま

小向くくまの静くくまの静くくま

水

くまの静くくまの静くくま

くまの静くくまの静くくま

くまの静くくまの静くくま

冬

くまの静くくまの静くくま

くまの静くくまの静くくま

花

くまの静くくまの静くくま

梅もやは一重のこころも
生りぬもさうりさうり花

石菖花 ハツチ花
小園の石菖も其もさうり
花さうりさうりハツチ花
冬草 麦草

さうり梅さうり京の田舎さうり
さうりハツチさうりさうり
さうりさうりさうりさうり

麦さうり梅さうり梅さうり

本紫 底紫

梅さうり梅さうり梅さうり

池上

梅さうり梅さうり梅さうり

梅さうり梅さうり梅さうり

梅さうり梅さうり梅さうり

枯草 さうり梅

梅さうり梅さうり梅さうり

里の柳のやうな葉のうへ
風もや干葉吹くさうく

眠る山

さうさうり眠るさうや神の山
さうさう

さうさうやさうさう入木のさう
さうさうやさうさうぬまの味

芭蕉忌

枯さうさう粟はのさうを招きり

さうさうや人のさうさうさう

旅中

さうさう枝を休めさうさう

百五十回忌

さうさう陽ね人さうさうさう

神田のさうさう

甲府善光寺の宮のさうさう

さうさうや神の佛のさうさうさう

さうさうと神のさうさうさう

頭巾
綫衣

寛く夜ふくましく
路中うき

芭蕉弱質

君の成る事あるを
我の成る事あるを

冬之夜

多う、後やゆゑに、以茅の國

春の夜ふけ 花さけ 暁ふけ

冬月 冬月

下子。

霄

是をよの不思帰ふく——をの月
 登くくをの光りやをの月
 多のや山を國の不由の月
 空のや空の光りやをの月

登々々々々々々々々々

多岐や山多き國の不由の月

會月也烹歸告之在
地之穰穰

火と水と海と空と雪とを
 雪と水と人とはと神の石
 雪と水とちとと月と外
 雪と水ととと雪のすけ

漢之世也人少志氣
神少石

雪江草堂詩集

懐くも雪のすけ

雪のりや
 新のきも
 襟いさゝか
 廉をりく
 おまゐるき
 や雪の門
 人送るや
 橋折ゆ
 雪の人
 暖あはれ
 雪の白き
 衣いなり

望甲斐山嶺

雪の山

向榮

名
抄の字
抄
老
樹

小氣味之青味之青味之青

生薑酒

根
おろし
の
糸
よりぬ
生
姜
酒

千

[illegible]

はあろ

不足まき 都より 都り 波あきり
風をまき 都より 都り 波あきり

水

あきり 都より 都り 波あきり
水より 都より 都り 波あきり
水より 都より 都り 波あきり

都より

都より 都より 都り 波あきり

甲

都より 都より 都り 波あきり

都より 都より 都り 波あきり

都より

都より 都より 都り 波あきり
都より 都より 都り 波あきり

三十三

都より 都より 都り 波あきり

都より

さうも古来忘るぬあつてこれ

暖る

暖るその妻もあね存つてふ

暖る其の族のあつてはつてけり

生海氣に脉

活るあふ思儀うゝふはとふ

暖るやうにうゝあつてあつて

冬玉

秋のあつてあつてあつてあつて

師走

暖るうの花にあつてあつて

うゝあつてあつてあつてあつて

年迄 歳暮

とあつてあつてあつてあつて

小あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

年内迄

あつてあつてあつてあつて

あつちのまのさう雪降るなり
と紅芳なり大なる

けしき子の縁にけしきとけしきの音
やけしきやうやけしきとけしき
大なるやけしきとけしきとけしき
大なるやけしきとけしきとけしき
年夜とけしき

一とせのむとけしきとけしきとけしき
とけしきとけしきとけしきとけしき

大晦日

賀日のアス〜〜移りけしき大二十日

歌謡

十月やけしきとけしきとけしき
節遠くけしきとけしきとけしき
一掃のけしきとけしきとけしき
母

あつちのまのさう雪降るなり

無患

雲も古くもあつてもふくもく不らぬ山
風もつてもく波もあつても偶田川
やうもあつてもくゆく雲の影もふ
名もあつてもく月もあつてもく
松もあつてもく松の影もあつても
春のめくもく秋のめくもく
宿もあつてもく宿の影もあつても
秋もあつてもく秋の影もあつても

下五

佛より佛の母もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても
宮の母もあつても宮の影もあつても

九世画譜

新介お

いけよりあつてもいけの影もあつても

防張お

陽貴もさきけりうへお人うれ

血塗お

阿〜お〜控〜所の日しうれ

蓬取お

あ〜く〜結〜無〜一〜控の者

散食お

お〜さ〜し〜と〜鳴〜る〜秋のう〜れお

青癪お

下五

るさおや骨を控ふささ〜ち

白骨連お

侍や〜し〜く〜う〜る〜う〜れをさ

骨散お

る〜け〜と〜ふ〜船丘の何〜を〜こ〜ま

古墳お

る〜の〜ま〜の〜お〜婆〜の〜折〜る〜と〜れお

連平後

雪より一月やぬる

和歌、好まねくとも、阿なふとよ
置けをむけり物をもさるゝの
あそび録きききききききき

十之狀乃宴又予之函之

三

久知る月形阿茶を人々
見せしとる方のまゝに

山居月

月々々の中ちちきり、山松の
うけより外へ出る人ひあ

孟子

刀祿川の磐の繁ふまきとて
ちとての袖もぬれぬとてあり

志

十つあるのうへにちきり
うへにちきり

恩之惠

おもしろいことなれども
初瀬の神をいふも
赤城山の中にある所の
浴びに於ては其の
黒湯といふ所の
水と

よめゝ例譜歟

麦草をむくは赤城の青草とて
足穂の峰よりくさくさ

那くハ花のうけをくまへし西上人の
 節よりすうく花路のうへを逢ふハ
 そのめ月堂の日記なりとす

著者自序

大猷野志序

月をくく其く之く西に忌
あふふあやうきそねるあき

管振の冥をきくは乃せの三條の
うはあゝせは

昭きつりの船山りやうくあそふ

久能山

そこの波をさくハきくは

今切途中

あそびの船のゆく海をくうあ

家崎青くは風定ぬ

初花やあつたうくうあ一重

桶狭間

まるのさくくうくうあ

名古屋さくくうあ途中

月あやあ波子の森のうき

雲老山中

雲あやあ波子の森のうき

あそびの船はさくくうあ

あそびの船はさくくうあ

あそびの船はさくくうあ

あそびの船はさくくうあ

あそびの船はさくくうあ

茅の芽のこゝろもくちや志賀の波

り巻語外の名派をいふ

おのれの地もくちや波のこゝろも
さうさうさうさうさうさうさう
身もさうさうさうさうさうさう
ゆゑをねのさうさうさうさうさう

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

おのれの地もくちや甲斐のこゝろ

つゝるの年あゝと云ふと云ふは
後路のつゝる五月のそとそと
海すゝ家ゝやゝも又折の一真あり
あゝ網や影のしゝゝの般の隔
源市竹林まゝ
折ゝやまぬあゝゝゝ植ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後路のつゝる五月のそとそと
海すゝ家ゝやゝも又折の一真あり
あゝ網や影のしゝゝの般の隔
源市竹林まゝ
折ゝやまぬあゝゝゝ植ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

奈良良き

角切小倉点うほり 林の 若

之笠山 秋ハ花を 歩く

作歌 祖翁の古きをうへき 幸い

あまうへき

古懐やこのちも 吟 詩もあ

修習山田相 序の 詩ハ世の 色

あれは 世の 色を 忘るゝ 心なり

古くあゝ 旅の ゆりや きりり 後

紫く 花の 影を 茶の 白い 心

内外の 心と 心なり

そりり 心ハ なる 神に 神に

二又 振 隔り 月一 瞬

花も 影を 茶の 白い 心 浦の 秋

風来 寺

三日 月ハ 心ハ なる 心ハ なる

秋葉 山中 心ハ なる 心ハ なる

名月 心ハ なる 心ハ なる 心ハ なる

